

デジタル活用共生社会実現会議（第1回）議事録

平成30年11月15日

1 日時

平成30年11月15日（木）14時30分～16時00分

2 場所

総務省 7階 省議室

3 出席者

（1）構成員（敬称略）

村井純座長、浅川智恵子構成員、石川准構成員、打浪文子構成員、大杉豊構成員、森義博構成員、神尾文彦構成員、竹中ナミ構成員、根本勝則構成員、松本純夫構成員、山脇啓造構成員、若宮正子構成員

（2）オブザーバー

柴崎哲也（内閣官房情報通信技術（IT）総合戦略室）、遠藤雅典（文部科学省）、小田切未来（経済産業省）佐々木浩（総務省地域力創造審議官）、堀江宏之（総務省行政管理局長）、沼田尚道（総務省国際戦略局技術政策課）、三田一博（総務省情報流通行政局地上放送課）、佐伯宜昭（総務省総合通信基盤局事業政策課）

（3）総務省・厚生労働省

<総務省>

國重徹総務大臣政務官、安藤英作大臣官房総括審議官、赤澤公省情報流通行政局審議官、犬童周作情報流通振興課長

<厚生労働省>

内山博之障害保健福祉部企画課長、田仲教泰障害保健福祉部自立支援振興室長

4 議事要旨

（1）開催要綱等について

犬童情報流通振興課長より、配布資料の確認及び資料1-1に基づき開催要綱について説明が行われた。

(2) 村井座長挨拶

(3) 事務局説明

犬童情報流通振興課長より資料1-2に基づき、本会議の検討の背景及び趣旨について説明が行われた。

(4) プレゼンテーション

浅川構成員より資料1-3に基づき、AIとアクセシビリティについてプレゼンテーションが行われた。

(5) 意見交換

【石川構成員】アップルとかグーグル、あるいはアマゾンのさまざまなサービスや製品が、概してアクセシビリティに対応しています。スマートフォンもそうですし、電子書籍リーダー、AIスピーカー、それから、セットトップボックスもそうです。それはなぜかという、米国やEUのアクセシビリティ政策、法制度があり、それが駆動してきたという面が大きいと思います。

もちろん他方に、個々の企業の社会的貢献への自発的な意思や、新しい問題にチャレンジすることによって企業としての技術開発、イノベーションができるといったような、そういうことももちろんありますが、やはり何といたってもニッチな市場に対して、それ相当の投資をするというのは法制度的なインセンティブや、あるいはサンクションがあつてのことだと思えます。

この分野においては、日本は、障害者権利条約の国内実施についての第1回の審査を2020年、ちょうど東京オリンピック・パラリンピックの年に受けることになっていまして、その際に、情報分野のアクセシビリティ政策の遅れを指摘される可能性が高いと思っております。そのため、この会議の成果も踏まえ、ぜひアクセシビリティを進めるための制度的な基盤をこれから作っていただきたいと考えています。もちろん私たちも、協力させていただきたいと思っております。

日本では、移動円滑化法という法律が既にあり、国交省所管のこの法律に基づく交通機関のアクセシビリティや、公共の建物のアクセシビリティに関しては一定の水準に達しています。もちろん課題はあるものの、他国と比べて遜色ないというか、成果を出している分野だと思えます。しかし、残念ながら情報やコミュニケーションについての法制度的基盤が未整備なので、監督諸官庁のガイドライン等や業界団体の自発的な取り組みでそこを補ってきているという面があると考えています。

【打浪構成員】私は、知的障害のある方たちに向けた情報保障のあり方についての研究をしています。今回、この会議に参加させていただくことができ大変ありがたいと思うとともに、知的障害分野はこうした情報アクセシビリティと縁遠い分野だと思われるのではないかと思いますので、ぜひ知的障害の人々にも光を向けていただきたいという思いを込め、発言させていただきます。

知的障害のある方にとっては、単純に情報通信機器が使いやすいかどうかだけでなく、アクセスの先にあるものがわかりやすくなっていなければ、アクセシビリティを達成したとは言えません。知的障害のある方の情報バリアというのは非常に複合的な形になりやすいのです。単純な物理的アクセスだけを考えていけばいいというものではないので、非常に課題が複雑化しています。知的障害の方一人一人の認知の特性は違うので、そういった個々に合わせた形で、AIの進化が一人一人に合った形にフィットしていくような未来が描けていけたらいいなと思いながら、今日お話を聞いておりました。

情報の複合的なバリアに対して何ができるだろうと考えた際、スマートインクルージョン構想の主な柱の中では、まずはデジタル活用支援員に期待します。知的障害のある方の情報入手の基本は人（＝支援者や家族）なので、活用支援員という方々が、どのようにして技術を使えるように伝えていけるようにするのが大きな課題となると感じました。今は特別支援学校でも比較的ICTの活用や推進が進んできたものの、知的障害のある方々の卒後の学びの場は非常に少ないのが現状です。生涯学習という観点からも、文科省の取組等と連携させながら、こうしたデジタル活用支援員などの普及を進めていく必要があると感じます。

また、知的障害のある方は、自己決定の場面などで主体性を発揮しにくい位置にあることが多いと思いますが、ICTの技術の活用により、そういった自己決定の部分をサポートできることが増えてくると思います。ですので、将来的に情報アクセスの法制度化などが進んでいくときには、情報のわかりやすさというところも含めて、アクセシビリティをしっかりと確保できるような形で追究をしていきたいと思いました。

最後にもう一点、浅川構成員のご発表の内容は、知的障害のある方にも使える技術がたくさんあるのではないかと感じました。おそらくこの後の先生のご発表の中にも出てくるのではないかなと思いますが、非常に狭い範囲のために開発されてきた

ものが、実はふたを開けてみればニーズの共通性があるという例ではないかと思えます。例えば、先ほどのNavCogを待っている知的障害の方は、非常に多いと思います。軽度や中度の方は1人で移動される機会というのも非常に多いですが、目的地まで1人で行くのが大変で、移動のアクセスが制限されます。その場合に、こうしたものがあれば、非常に大きく彼らの世界が変わる可能性があると感じました。この会議で、障害の種別を超えて共に使える技術の検討や、共通するニーズの掘り起こしは、ぜひやっていただきたいと思えます。

【大杉構成員】(手話言語で発言) 本日は聴覚障害の分野、それから、手話言語学の専門の立場で意見を求められていると思えます。

聴覚障害者の情報アクセシビリティを考える時、音情報アクセシビリティ、音声言語情報アクセシビリティ、手話言語情報アクセシビリティの3種類に分けて、聴覚障害者のニーズ、サービス実施の現状、技術開発の進捗状況をヒアリング調査で明らかにしていただきたい。とくにタイミングとしては、電気通信分野で聴覚障害者の完全な社会参加を実現するためのサービスに関する制度的発展と技術的発展の方向づけがこの会議に期待されていると考えています。

手話言語情報アクセシビリティに関しては、世界ろう連盟と世界手話言語通訳者協会が本年3月14日に発表した、手話アバターに関する共同声明に留意していただきたい。警告的でありながら言語学的な説明が丁寧にされている内容です。

【此本構成員代理(神尾)】 私は、企業という立場から本検討会にコメントさせていただければと思っております。此本がスマートインクルージョンの実現に向けた懇談会でもお話ししましたが、我々の会社では2015年に障害者雇用の特例子会社NR Iみらいを設立しております。今回の会議で受付もさせていただいております。NR Iみらいは、40人弱ぐらいの障害がある方が在籍しているのですが、身体障害者が大体2割強、知的障害者と言われている方が大部分でございます。

こういった知的障害者を中心とした方と、これまで二、三年かけていろいろ仕事をさせていただいている中で、今回の会議のお話があったのですが、障害者の方と企業、アクセシビリティを考えた際、3点ほど気づきを得ましたので、コメントをさせていただきたいと思えます。

1つは、障害者自身の仕事の在り方についてです。どういう仕事を願うのかですが、業務を切って、この部分を障害者の方にとしがちではありますが、実は、

知的障害者の方は、その仕事がどういうゴールなのか、どういう目的を持って、誰が喜ぶのか、こういった目的、ゴールとあわせてしっかり共有をして、仕事をお願いすることで、非常に生き生きと生きがいを持って仕事をしていただけることがわかってきました。

もう一つは、指導員と言われている方です。指導員は採用するのが非常に難しく、2つスキルが必要となります。1つはやはり障害者の方と心の対話ができる方。2つめは、弊社の場合、ビジネスをやっていますので、福祉という観点だけではなくて、ビジネス的な意図、意識を持った方。こういった方をいかに採用し、障害者の方と一緒に仕事をつくっていきけるか。これが非常に重要なポイントではないかと思っています。

幸い、弊社はコンサルタントやIT系の業務の経験者を指導員としておりますが、他の社会や、地域の中でどのように指導員のなり手を確保していくのかという視点は非常に重要と思っています。

3点目は地域です。企業の立場から申し上げますと、東京で障害者雇用というのはなかなか難しい状況が背景としてあるため、東京の企業であっても、地方で障害者を雇用するケースというのは増えています。そうしますと、地域の中で、テレワークを駆使して、いろんな方に自宅にいながらにして仕事をお願いするケースがあります。その際、単に情報通信基盤を整備するだけでは、重度の障害者ですと、マウスを落とすだけでも仕事ができなくなります。NPO等、近くにサポートをする人がいるかということも重要なポイントではないでしょうか。障害者自身、指導員、さらには地域、それぞれの立場でアクセシビリティの仕方も違います。多層的な構造の中で、AI等のICTをどのように導入していくのか。地域によっても個性が違いますので、そのあたりの多様性という部分を、コミュニティ創造部会を中心に、議論をしていただければなと思っています。

浅川構成員が、多様性のある企業がAIをつくるとおっしゃっていました。

そういう意味では、我々もどのように障害者の方と一緒に仕事をつくっていくかという観点で、今後も本会、部会の推進にコミットをさせていただければと思っています。

【小宮山構成員代理（森）】私は地域コミュニティ創造部会での検討事項に関連して、コミュニティについて少しお話をさせていただきます。デジタルなりICTを活用

してコミュニティを創造しようというご提案だと思いますが、今、日本のICTの国際競争力は色々と指摘がされている時期だと思います。

今スポーツの世界では、日本のスポーツ選手が海外に出て行って、相当活躍している。この要因は、生まれ育つコミュニティの中で、スポーツに親しむ機会が確保されている点にあると思っています。小学生のころからいろんなクラブだとか、サークルのようなものを使ってスポーツに親しみ、その中で優秀な人が選抜され、どんどん上のランクに上がっていく仕組みのおかげで、今、世界的な競争力がスポーツ界に生まれている。

同様のことがICTにも言えるのではないかと考えておまして、小さいころにプログラミングは楽しいという体験をしてもらい、自分から自発的にやりたいと子供が思える環境なり、土壌が醸成できれば、ICTの人材の底上げというのはできるのではないかと。そういう意味では、地域ICTクラブや、デジタル活用支援員に期待しています。当然、高齢の方もICTを活用すれば生活がよりよくなるのは自明のことですので、地域の中からICTを盛り上げていくことが、必要と考えております。

ただ、これを実現するためには、小学生や高齢の方にこういうことをやると便利ですよと分かりやすくICTを説明できる人というのは大事だろうと考えております。プログラミングで言いますと、最近の小学生でとてつもなく高度のプログラミングができる人がいますが、そういう人たちはいい指導者に会ったからということだと思います。どのように教える人を見つけてくるかということが大事になると考えております。

私は今、三菱総合研究所というシンクタンクにおりますけれども、メーカーのほうが長いキャリアを持っており、ICTにかかわる開発をやっておりました。その経験から申しますと、ちょうど今リタイヤし始めている人たちは、インターネットの黎明期、あるいはコンピューターの一般的な普及期に差しかかっていたころに開発や研究の中核をなしていた人たちで、その方々が定年退職によって世の中にリリースされています。そういった、現役の頃は大体仕事に没頭していて、地域のコミュニティに顔がない人たちが、地域コミュニティに参画する一つのきっかけになる気もいたしますし、そういう人たちの活用も含めて、どうやって人を作っていくかがうまく制度化されて回っていけば、日本のICT競争力も底上げされるのではな

いかと考えております。

【竹中構成員】浅川さんのお話の中で、キャリーバッグが道案内をするというのがあり、とても興味を持ちましたので、どのような技術の組み合わせでできているのかを後で教えていただきたい。プロップ・ステーションを発足して、草の根の時代から約30年、障害の重い方々がICTを活用して、社会の中で働き、タックスペイヤーになっていけるようにという活動をやってきました。

情報通信技術が日本にほとんど普及していないころから、大勢の身体、知的、視覚、さまざまな障害のある方々が今日まで活動してきたのですが、一番最近仲間入りをした25歳の青年が、生まれながらの全盲かつ脳性まひで、車椅子に乗っていらっしゃるんです。

彼の目標はひとり暮らしをして、働いて、自分をここまで育ててくれた親にきちんと恩返しすることで、プロップ・ステーションでスタッフとして活躍しているのですが、全盲かつ脳性まひで車椅子に乗られているので、白杖がまず使えません。自分自身で移動するのが難しい。車椅子をヘルパーの方や、ご家族が押されるという形ですね。脳性まひで指が震えるので点字も読めないんです。ただ、彼は子供のときから情報通信技術、コンピューターとラジオが大好きで、ラジオの英語放送を聞いていました。いまや私と一緒に講演に行くと、学生相手に英語落語みたいなのを聞かせてくれるという非常に明るい男の子なんです。

彼と一緒に仕事をしていて、自動車の自動運転というのがここまで議論される時代なので、車椅子の自動運転も重要なものになってきているのではないかなと考えたんです。どのような方法があるだろうと思ったときに、このキャリーバッグの技術が車椅子にも応用できないかと考えました。車椅子の自動運転が実用化されれば、いきなり公道を移動するということは無理であっても、自宅から電車に乗って、決まった経路でプロップ・ステーションのオフィスに来る。そこで、オフィスの中も自由に動いて、仕事をして、また自宅に帰ることができる時代がもうそこまで来ていると思いました。

そういう男の子なのでぜひ力をかしてやっていただきたいし、彼を通じて私たちも一緒に新しいステージに上がっていったらなと思っています。

ということで、大変、私たちの個人的なご相談なのですが、キャリーバッグの技術について少し浅川さんから教えていただけたらありがたいです。お願いし

ます。

【根本構成員】私が所掌する分野で共生社会の話をするに際し、数年前からずっと、いわゆるユニバーサルサービスという観点から、主に町の構造、あるいは、人の心の壁の問題等々の課題をいろいろ扱ってきたことがございます。その中で、アクセシビリティの問題についてもいろいろと検討してきたことは事実ですが、先ほど浅川様の発表の中で、やはり人数の問題があって、なかなかマーケットとして成立しにくいという問題提起がございました。いずれ皆が高齢化し、高齢者全てが同じような障害に直面する可能性が極めて高い。そこで、マーケットのサイズの問題については解決できるのではないかというような考え方をとっていたことを最初にご紹介させていただきたいと思えます。

ICTにつきましては、経団連としては、Society 5.0という新しい時代の提唱を行っております。これは一言で言うと、AI-Readyな社会をつくらうということです。技術の点については、先ほど浅川構成員の発表のなかでAIバイアスのご紹介がございましたが、データセットの重要性についてはもう当然のことですが、100%偏りのないデータを集めるのは不可能に近いので、どれだけ純化できるかということになるかと思えます。その際、多様性をどれだけ織り込めるかが課題であるということは、我々が発表いたしましたレポートの中に数々書いてございます。

つくるべき社会として、当然、AIとかロボットとかIoTとか、分散型台帳のような技術体系がもとなるわけですが、技術は中立なので、使い方によってはディストピアにもユートピアにもなります。私どもとしては、クリエイティビティの創造力とイマジネーションの想像力、両方をICTとあわせ、全て備えた日本こそがおそらく成長の基盤となるし、多様性を内包した際には、世界の標準化もここで生まれ得る新しい社会の実現が可能なのではないかと考えております。

レポートの中で、インクルージョンというのは一つのコアの概念となっており、多様性を内包しない限りは発展もないということもはっきり書かせていただきました。そういう観点から今後の議論に参加をさせていただければと思います。

【松本構成員】いわゆる臨床医、医療関係者は多数いらっしゃいますが、ほんとうに患者さんを直接見て手術をしているのは私だけだと思いますので、その現場感覚から発言させていただきます。

私は、2005年に名古屋の大学から東京医療センターの院長に就任いたしました。ちょうど2000年前後でしたけれども、いわゆる妊婦たらい回し事件とか、救急医療の崩壊とか、そういうことが盛んに言われていましたが、270人ぐらいの医者が働いている東京医療センターといえども、いわゆる24時間全ての専門スタッフを働かせるということは不可能でした。

タスクシフトという考えもあまりなかった時代でしたが、いわゆる電子カルテや、CTとかMRIのような画像情報に、インターネットを使ってアクセスできるようにする方策を、東京都から資金をいただいて完成しました。それにより、専門医が自宅にいても、患者さんが来たので電子カルテにアクセスして、レントゲン写真を見てくれませんかということが可能になりました。現場の医師ではわからないような所見を拾って、救命につながるようになりました。ほんとうの意味で外科の手術をするのも、年に2回か3回は必ず緊急手術になって救命することができるような現場をつくってきました。

現在は、慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスの前にある病院で、顧問として遠隔診療のお手伝いをしております。4月から、いわゆるオンライン診療を厚労省が認めました。しかし、4つの慢性疾患だけにとどまっており、そんなに高額報酬はいただけないシステムになっています。

しかし、医療現場において、実際は健康相談、あるいは医療相談というニーズがものすごく大きいんです。それに関して現在は、患者さんは病院まで来て、信頼できる医師にいろいろ意見を聞いています。そういう中、湘南藤沢キャンパスそばの湘南慶育病院で、テレビの裏にインターネットの端子をつなげて、ご家庭でも医師とそのまますぐ話ができるというシステムを作りました。さらに、病院から、患者さんの家族に対して、ソーシャル・ネットワーク・サービスを使って、いつもメールが行くシステムも運用中です。毎日ではありませんが、何か変わったとき及び定期連絡として、1週間に2回くらいはお父様、お母様の状態についての連絡が行くようになっています。

テレビを使うことで、見守りとして使えるだけでなく、いろんな相談、医療以外にも使える。別に医療だけではなく、デジタル活用支援員の仕組みにも利用できる仕組みだと思っています。ネットを使って、困っている人が、自分が持っているスマホの画面を見せて、どこを押したらいいんですかとか、そういうことも実際に聞

けるのではないかと。いわゆる遠隔医療のシステムを、デジタル生活の中での医療以外の相談にも使えるのではないかと。

今行っている遠隔診療というのは、実は、精神的な問題、心理的な問題で病院に来ることができない人たちをも助けることができる可能性がある。例えば閉じこもりで学校に行けないお子さん。でも、テレビのモニターの前なら出てこられるかもしれない。あるいは、対人恐怖症、パニック障害、うつ病の方、そういう方の相談にも応じることができて、今後、非常に有力な診療のツールになるであろうと思います。テレビの後ろにインターネットをつないで、テレビの上に高精細なカメラをつけるといったシステムが日本の全ての家庭に可能になれば、もっと不安なく生活できるようになるのではないかと確信しております。

【山脇構成員】私は30年ぐらい前から日本に暮らす外国人に関する研究を始めました。10年ぐらい前から総務省が多文化共生に関する研究会というのを設置して、地域に暮らす外国人に関する課題に関する検討を進めてきたのですが、そうした研究会に参加をしてきました。

9月に開催されたスマートインクルージョンの実現に向けた懇談会のときにも申し上げたのですが、インクルージョンをテーマにした会議の中に、外国人に関する課題も取り上げていただける時代になったことを感慨深く思っています。

アクセシビリティということで、外国人に関して考えますと、まずは言葉の問題、言葉の壁ということがさまざまな外国人住民にとっての情報へのアクセス、あるいは行政サービスへのアクセスという面で、一つの課題になっています。ICTの活用という面では、自動翻訳、通訳が今期待されているところではないかなと思います。特に、オリンピック・パラリンピックに向けて、開発も急速に進んでいるというふう聞いています。

前回は申し上げたのですが、やさしい日本語という、わかりやすく文章を短くして、外来語などを使わずに話すということが、これまで防災のときの外国人への情報伝達、あるいは自治体における生活情報の伝達、最近では外国人観光客に向けての活用といったこと観点で議論されてきたのですが、自動翻訳がこれから本格的に活用される中で、そのやさしい日本語の活用ということがより大きなテーマになってくるのではないかなというふうに感じています。

障害者に関する取り組みや課題、あるいは高齢者に関する取り組みや課題といっ

たところと、今後増加することが見込まれている外国人住民に関する課題を考えるときに、オーバーラップする分野が出てくるのではないかなと感じています。おそらく今後、障害者の中にも外国人の方が増えていくでしょうし、あるいは高齢者の中にも外国人の方も増えていくと思います。そうした意味で、今回の会議は非常に大きな意義があると感じております。

【若宮構成員】皆様のお話を伺っていて、こういう会議が開かれることがすごく有意義だということがわかりました。やっぱり家族と地域社会というのは非常に重要な役目を果たすと思います。家族が今どうなっていて、どういう方向に行っているか。私なんかは独居老人として扱われているわけですがけれども、今いろいろ問題になっています実質独居老人というのがあるわけです。

例えば、息子さんが同居していても、朝早く出て行って、夜遅く帰ってくる。家庭内事故が起こったときなど発見が早いのは、皆さんがチェックしてくださっているだけあってむしろ独居老人のほうだったりしている。だから、家族がどういう状況になって、これからどういう方向に行くのかきちっと考えていただきたい。

次に、地域社会がこれからどうなっていくのか議論したいと思っています。今地域社会の底支えをしているのが町内会とか自治会とか言われている存在ですがけれども、加入率がついに50%を切ったところなどもあり、会費を払って自治会に入っている人だけがごみの当番が回って損をするというような実態になっている。共生社会をつくっていく際、これからの地域社会について議論する必要があります。

もう一つは、やはり基本的なインフラとして、どこの家庭にもネットが使えるようにすること、マイナンバーカードが実際にワークするような体制をつくるということが重要です。松本先生のお話もありましたように、マイナンバーカードがあって、カルテが特定できれば、緊急の場合でも随分対応が早くなるのではないかと思います。そういうインフラ的なものについてぜひ検討していただきたい。

私自身がもう十分高齢化してきまして、高齢者というのはこういうものだということに気がつくようになりました。もっと我々後期高齢者というか、80代、90代の人の意見も聞いていただきたいと思います。

といいますのは、認知症の人の場合、ペットボトルで適切に水分をとれれば必ず書いてあるのですけれども、実際に救急車が行って見たら、手の届くところにペットボトルがあったそうです。ただ、あかないから飲めなかった。これについては、

私も事業者の方ともお話をしたのですけれども、不純物が入っていない、ばい菌が入っていない、どうやってしっかり締めるかということが大事な問題で、あけにくいということについてはあまり考えていなかったという食い違いみたいながあります。

それから、今、一番プライオリティの高い緊急の問題はお風呂の溺死です。私のいとも、つい最近、お風呂で溺死しましたし、友人のお母さんもお風呂で溺死しました。これは女性に非常に多く、インフルエンザよりもっと怖いのです。

インフルエンザだったら、救急車を呼んだり、お医者さんにかかったり、薬を飲む時間がありますけれども、お風呂の溺死の場合は、即死体で発見されているわけです。ITの力でシニアの困り事が解決できるとすれば、こういうプライオリティの高い問題については、総体的なことを論じていただく中で緊急の問題としてご検討いただければと思います。

それから、地域社会のIT化については、今、私の所属しておりますブロードバンドスクール協会も協力団体として頑張っていますので、また、次回にもご報告させていただきますと思います。ありがとうございました。

【浅川構成員】 ぜひこの会議でご議論いただければと考えているトピックが2つあります。先ほどのプレゼンテーションの中では、世界中どこの国にも存在する社会実装の壁についてお話ししました。ただ、特に私が活動している米国と比較して、日本にはイノベーションから社会実装に至る際に特別な壁が、存在しているように感じています。例えば、あるテクノロジーが開発されると、実証実験を経て社会実装に移っていくわけですが、信頼性や安全性に対するハードルが高く、「万が一何かが起きたときにどうなるんだ」という懸念が解決されない限り、実証実験のパートナーすらなかなか見つからない現状があります。ユーザーが多少のリスクはあっても先進的な技術を使いたいと思っても、受け入れる側の「何かがあったらどうするんだ」という意識がまさってしまう点が、米国とは違うと感じています。文化的なものかもしれないのですが、こういった壁をそのまま放置しておくと、日本がイノベーションを起こせない国になってしまうのではないかと心配しています。改善策についてぜひご議論いただければと思います。

もう一つは、当事者参加型のICTアクセシビリティを実現するための人材の育成です。障害者、女性、高齢者が入ってさえいればそれで大丈夫、という事例をよ

く見聞きします。当事者が参加するというのとはどういうことなのか、どういうスキルが必要なのかということを示していく必要性を感じています。企業においてアクセシビリティのニーズに基づいた製品開発を行う際には、障害者がチームに求められるわけですが、どういうスキルを持った障害者が企業において必要とされているのかクリアに周知できていないと感じています。そのため、何を大学で学ぶべきかわからず、せっかく大学を出て就職しても学んだスキルを生かせないというケースを私もみてきました。せっかく職域を拡大していくわけですから、是非、当事者参加型の技術開発に必要な人材像についても積極的に議論できればと思います。米国では、あらゆるアクセシビリティ関連プロジェクトや製品、また国際会議などに、必ず障害者が参加していてしかも非常に積極的です。日本はまだまだ消極的な部分があるかと思っています。

これらの2点について、ぜひ皆様とご一緒にご議論できればと思います。

(6) 部会設置について

開催要綱4(7)に基づき、デジタル活用共生社会実現社会の下に、ICT地域コミュニティ創造部会及びICTアクセシビリティ確保部会を設置することが決まった。

(7) 総務大臣政務官・厚生労働大臣政務官(代読)挨拶

(8) 閉会

以上